

序章	3
第一節 本書の目的	3
第二節 先行研究と問題点	9
第三節 使用する主な史料	17
(一) 住友家文書	17
(二) 初村家文書(別名峰家史料)	24
第四節 本書の内容と目的	25
第一章 大坂銅商人社会の成立と変容	35
第一節 大坂銅商人一覧	35
①銅屋	36
②銅吹屋	39
③銅問屋	43
④銅仲買	46
⑤銅細工人	48
⑥古銅類取扱い業者	50
⑦真鍮地銅屋・真鍮吹職	54
⑧居住町別一覧	55

第二節 「銅吹屋の時代」から「銅仲買と真鍮屋の時代」への移行	63
第三節 棹銅の製造法・南蛮吹の効用と銅吹屋	72
(一) 棹銅の製造法	72
(二) 南蛮吹の効用	75
(三) 銅吹所の設備と作業	77
第四節 銅吹屋仲間一七人の変容	79
第五節 真鍮産業の発展	85
(一) 京都における発展	85
(二) 真鍮座の周辺とその後	88
(三) 大坂における発展	91
(四) 真鍮産業のその後	95
第二章 大坂銅商人の長崎銅貿易	101
第一節 定高制	101
第二節 銅代物替	106
第三節 運上付き請負	112
第四節 元禄銅座	116
第五節 銅吹屋仲間の長崎廻銅請負	124
(一) 銅輸出値段の引上げと前銀の支給	125

(一)	荒銅大坂集中令と産銅状況の全国調査	126
(二)	荒銅買入れ値段の調整	128
(三)	棹銅製造原価の確定	131
(四)	償い銀の確定と支給	135
(五)	長崎廻銅請負いと銅吹屋仲間	136
(六)	長崎廻銅請負いと銅吹屋仲間	136
第三章	長崎会所の銅貿易と大坂銅商人	142
第一節	御割合御用銅	142
(一)	御割合御用銅の仕法	142
(二)	銅輸出値段の切下げ	148
(三)	御割合御用銅と銅吹屋仲間	149
第二節	第一次長崎直買入れ	150
第三節	元文銅座の設置と荒銅買上げ方法	157
第四節	長崎会所と幕府御金蔵	163
第五節	第二次長崎直買入れとその後	167
第四章	地売銅と鉛鋳業	177
第一節	近世の地売銅	177
(一)	鑄銭用銅	178

(一)	細工向き銅	180
(三)	対馬藩の貿易銅	190
第二節	近世の鉛鋳業	199
(一)	近世鉛鋳業の位置	199
(二)	鉛山の分布	200
(三)	鉛の製錬法	204
(四)	鉛の消費と流通	207
(五)	残された課題	213
第五章	元文銅座と大坂銅商人	220
第一節	元文銅座の鑄銭	220
第二節	元文銅座後半の諸問題	223
(一)	元文銅座期の銅値段	223
(二)	元文銅座後半の諸施策	224
第三節	元文銅座の勘定帳	230
第六章	明和銅座と大坂銅商人	245
第一節	明和銅座の設置と銅の総体的統制	245
第二節	明和銅座の地売銅統制	252

(一)	地売銅公定値段の決定	252
(二)	地売銅値段の推移	259
第三節	古銅の統制	263
第四節	明和銅座の財政	270
第五節	専売制の継続と御用銅の廃止	275
終章		281

あとがき

索引(人名・事項)

〈図表目次〉

序 章

図 1 長崎唐船・オランダ船銅輸出高（正保三〜嘉永四年〓一六四六〜一八五一）……………5

第 一 章

表 1 銅屋の割付貨物銀高・輸出銅高・長崎下し銅高（寛文二二年〓一六七二）……………65

表 2 銅屋・銅吹屋一覽（元禄五年（一六九二）、元禄一四年（一七〇二）、正徳二年（一七一一））……………67

表 3 地売吹銅落札人（文政二〜元治元年〓一八一九〜一八四四）……………69

表 4 銅吹屋から出る灰吹銀（元禄五〜安政六年〓一六九二〜一八五九）……………76

表 5 銅吹屋仲間御用銅吹方割方（正徳二年・寛延三年〓一七二二・一七五〇）と万延元年（一八六〇）の職人数……………84

表 6 銅吹屋の吹床、所有・休止・稼働の状況（明和二年〓一七六五）……………85

図 2 亜鉛の輸入高（享保一八〜天保三年〓一七三三〜一八三二）……………89

第 二 章

表 1 長崎銅輸出値段と輸出高（貞享二〜正徳五年〓一六八五〜一七二五）……………104

表 2 大坂銅吹屋買入荒銅高（宝永五〜正徳五年〓一七〇八〜一七二五）……………105

表 3 長崎銅貿易、貞享二年（一六八五）・正徳五年（一七二五）対比……………105

表 4 銅代物替銀高（元禄八〜正徳五年〓一六九五〜一七二五）……………111

表 5 唐船代物替銅口銭・銅代銀・口銭銀の配分（元禄九・一〇年〓一六九六・九七）……………111

表 6 荒銅・吹銅の相場（元禄一二〜一四年〓一六九九〜一七〇二）……………120

表 7 荒銅・吹銅の相場（宝永五〜正徳二年〓一七〇八〜一一二）……………120

表 2	対馬藩に対する住友の古貨一覧(寛政九年〓一七九七)	199
表 3	鉛の産出状況	203
表 4	鉛の製錬経費の見積もり	207
表 5	鉛の値段の概況	209

第五章

表 1	荒銅値段一覧(寛延元年〓一七四八)	225
表 2	元文銅座の銅山宛て貸残・仕入損銀一覧	242

第六章

表 1	大坂地売吹銅相場(宝暦元〓明和二年〓一七五一〓六五)	246
表 2	銅座役人(文久二年〓一八六二)	249
表 3	長崎御用銅買入高と唐蘭輸出高(宝暦元〓寛政二年〓一七五一〓九〇)	250
表 4	主要銅の地売吹銅製造費(明和三年〓一七六六)	256
表 5	明和銅座の札吹銅一覧(明和三〓慶応三年〓一七六六〓一八六七)	257
表 6	明和銅座の地売銅売買(明和三〓安永五年〓一七六六〓七六)	258
表 7	明和銅座の吹銅売出・荒銅買上値段と吹賃の推移(明和三〓文政元〓一七六六〓一八一八)	260
表 8	明和銅座の地売荒銅買上高(文化七〓文政一二年〓一八一〇〓二九)	260
表 9	明和銅座の入札払い吹銅の落札値段(文政二〓元治元年〓一八一九〓六四)	261
表 10	江戸における吹銅入札払いの例(文政二〓文久三年〓一八一九〓六三)	269
表 11	明和銅座の地売銅収支(明和三・安永五年〓一七六六・七六)	272
表 12	明和銅座買入地売銅一覧(文久二年〓一八六二)	277

序章

第一節 本書の目的

本書は、近世日本における銅の生産・流通の歴史を、銅の最大の市場である大坂において銅商人社会が成立・変容する過程を軸にして、通覧することを目的とする。銅貿易の動向や幕府の統制、長崎会所・藩・山元（鉱山）などとの関係は可能な限り視野に入れる。

近世を通じて銅の用途の第一は輸出であった。長崎の輸入貿易では周知のとおり、主要輸入品である白糸を対象にして早くから糸割符制度という独占策が施行されたが、輸出では銅は長年、銅商人が外国商人と値段や数量を交渉して取引した。それが元禄十年（一六九七）から、長崎会所が輸出入を一元的に経営あるいは管理するようになった。やがて主要輸出品である銅は国内相場より安く赤字で輸出するようになり、十数年を経て赤字を輸入貿易の利益で補填するのが長年の慣行となった。国内でも銅は銅座が管理する統制品となった。銅取引のこのような激変はいかにして起こったのか。かつて銅を外国商人に自由に販売した銅商人は、変化の過程でいかに行動し、その結果どのような存在になったのであろうか。銅商人社会の変容を把握することは、銅の歴史を説明するひとつの重要な糸口である。

近世日本は銅資源に恵まれ、産出する銅の大半を輸出した。古代に盛大であった産出が衰退し、再び上昇した

十五世紀以来、銅は中国・朝鮮に輸出された。近世初頭には朱印船・ポルトガル船・唐船・オランダ船の貿易で、銅は当時最大の輸出品であった銀に次ぐ重要輸出品であった。この貿易の傾向は、いわゆる鎖国になっても大きな変化はみられなかった。日本銅は、中国・インド・東南アジア・朝鮮などで、銅製の小額貨幣（銅銭・銅貨）をはじめとして、さまざまな器物・雑貨の材料として需要があり、銅を日本から搬出した商人たちは概して大きな利益を獲得した。

まずオランダ東インド会社の銅輸出をみると、それは単なる売買益の獲得だけでなく、ごく一時期ではあるがヨーロッパの銅相場を動かすために日本銅を国際政治の場で利用したこともあった。通常、銅はオランダのアジア域内貿易の基軸商品であり、とくに南アジアで小額通貨や種々の日用品の素材であった。十八世紀に産業革命のはじまったイギリスが自国の銅を持ち込んだが、オランダは日本銅が国際的にみて安かったので、持ちこたえたとされる。またオランダは早い時期に棹銅を輸出銅の形状の標準にしたことよって、日本の銅生産・流通に多大の影響を与えた。⁽¹⁾

次に近世を通じて最大量の銅輸出先であった中国（清）は、もっぱら鑄銭用に日本銅を使用し続けた。⁽²⁾はじめ清政府は海商の反清活動（その代表が鄭氏勢力であった）を制圧するために、一六八四年（日本の貞享元年、清の康熙二十三年）までは日本への渡航を禁止した。鄭氏ら海商は仲介貿易で日本銅を輸出し、また銅を輸出した唐船には鄭氏らに属せずに、渡航禁止をくぐった船もあったようである。清が渡航を解禁すると唐船の来航は急増し、ちようど最盛期に差しかかった日本銅を輸出した。この時から唐船の銅輸出高の順位がオランダと逆転した。

こうした長崎貿易における銅輸出高を示す単一の貫した史料はなく、いくつかの史料を集めたものを図1に示す。⁽³⁾

一方、対馬口（朝鮮貿易）、薩摩口（琉球貿易）からも銅は盛んに輸出された。このうち朝鮮では十七世紀末と

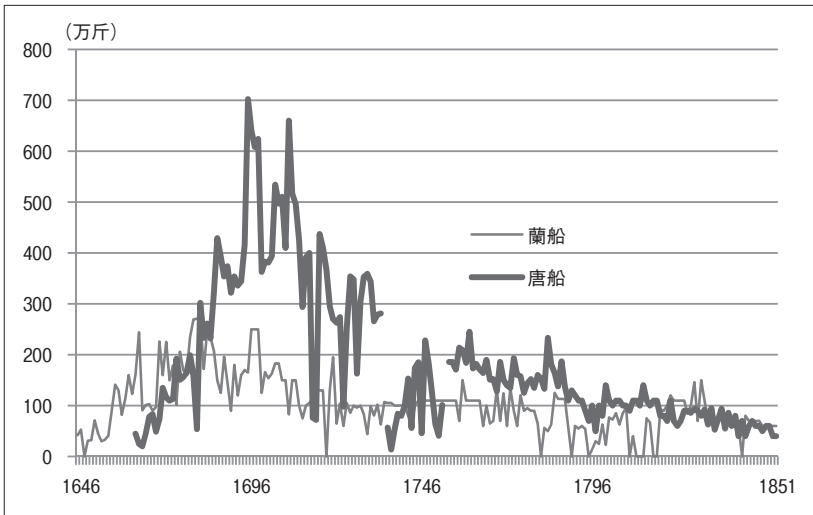


図1 長崎唐船・オランダ船銅輸出高（正保3～嘉永4年=1646～1851）

十八世紀中期に銅銭の大量鑄造があり、銭の使用が普及した。原料の銅は日本からの輸入品で、流通銭は不足に陥りがちであった。朝鮮の経済にとっても対馬藩の対朝鮮貿易にとっても、日本の銅は重要であった。⁽⁴⁾ さらに薩摩から琉球へ持ちこまれた日本銅は、進貢船・接貢船によつて中国へ数千斤程度輸出され、これも鑄銭原料とされた。⁽⁵⁾ これら対馬・薩摩で調達される銅は、日本国内では「地売銅」（国内向けの銅）に属していた。

このような日本銅の海外における需要は近世を通じて持続した。ちなみに近代になって銅山の近代化・再開発によつて産出が拡大した。国内需要も増大したが、輸出がまず拡大し、第一次大戦まで日本は銅の輸出国であった。⁽⁶⁾ その後も現在まで銅は外国産の鉱石を原料として日本の主要産業の一角を占めている。

近世日本銅の産出と用途別の推移をまず概観しておく。図1では、長崎の銅輸出は十七世紀後半著増し、同世紀末から十八世紀初頭にかけての十数年間が最盛期である。銅生産全体の動向もこれに並行するものと考えられ、これに鑄銭用銅と細工向き銅の数量（それらは後述する）を

合わせると、年産八〇〇〜一〇〇〇万斤（四八〇〇〜六〇〇〇トン）と推定される。年産一〇〇〇万斤というのはごく一時的には世界一であったとされる。生産はその後漸減し、同じく図1では十八世紀末から十九世紀の長崎の銅輸出は二〇〇万斤で、細工向き銅一〇〇万斤弱（後述する）との合計三〇〇万斤弱となり、この数量は最盛期の三分の一程度である。その途中の元文三〜延享二年（一七三八〜四五）には鑄銭の高まりがあり（後述する）、産出の漸減が一時鈍化したと推定される。ただし鑄銭は高まると同時に採算割れとなり、寛永通宝銅一文銭の鑄造はこの時期をもって終了した（後述する）。

銅は最盛期の輸出高の多さのゆえに、銀に代替する主要輸出品として位置づけられた。その最盛期は短期間であったが、十八世紀半ばまでは最盛期に次ぐ輸出高を維持した。このような産銅高・輸出高・ほかの用途の概要は、基礎的事項として確認しておきたい。このほかに古銅（銅スクラップ）の流通も次第に無視できなくなるが、数量的な把握は困難である。

次に以下の諸視角から銅の生産・流通における変動をみて研究の課題を指摘したい。

〔1〕長崎銅貿易の仕法による時期区分は、銅商人の関与の仕方によって、①銅商人が荷主、②長崎会所が荷主または窓口、に大きく分けられる。①の時期の銅貿易は商売（営利事業）、すなわち黒字輸出である。さらに細分化すると、最初の時期はだれでも自由に参加できる、次に古来銅屋が独占する、その次は桔梗屋ら（古来銅屋ではない商人）が高額の運上をもって一手に請負うがすぐ撤退し、輸出が自由化、その後すぐ元禄銅座が設置され、①の最終段階である銅吹屋仲間長崎廻銅請負いは商売として辛うじて成立、ということになる。右の一手請負いと元禄銅座の時期、銅輸出の荷主は請負人・銅座であり、銅商人は荷主へ輸出銅を商売として供給した。

②の時期の銅貿易は仕入れ値段が輸出値段を上回る赤字輸出である。最初は御割合御用銅（幕府勘定所が荷主、長崎会所が窓口）、次に第一次長崎直買入れ（これ以後ずっと長崎会所が輸出の荷主、輸出銅の供給元は多様）となり、

その次は元文銅座（銅座が御用銅を供給）、第二次長崎直買入（山元が御用銅を供給）、明和銅座（銅座が御用銅を供給）と変遷する。輸出値段は①の時期は外国商人と交渉して決めたが、②の時期にはほぼ固定され、ある時期以後はまったく固定される。その経緯は従来の研究で明らかにされておらず、この説明は本書の課題である。

（2）国内消費用の細工向き銅については、京都が古くから銅製品の加工地かつ中心市場であった。十七世紀半ばに棹銅が輸出銅の標準になったため、その製造地大坂が銅市場として台頭した。徳川幕府の貨幣制度である三貨制の一角をなす寛永通宝を铸造する錢座が各地で間歇的に活動し、その銅需要は具体的には不明であるが、京都・大坂の細工向き銅と拮抗したと考えられる。十七世紀後半、産銅が著増すると、増産分の多くは長崎の輸出向けとして大坂で棹銅にされ、ほかに寛永通宝用も相当あつていわゆる文銭が铸造されたと考えられる。十七世紀末から十八世紀初頭には大坂が最大の銅市場となり、京都は依然として最終製品の製造地ではあるが、地金の多くが大坂から供給されたと考えられる。

このころから大坂銅市場の細工向き銅の動向については、銅吹屋仲間の関与の仕方によって、①銅吹屋が掌握した時期、②銅仲買が台頭した時期、の二期に分けられる。①の時期、とくに銅吹屋仲間が長崎廻銅を請負った正徳二（五年）（一七二一—二五）、各地の鑄錢用以外の銅は大坂に集中し、銅吹屋は銅座同様の存在として、輸出銅はもちろん、細工向きの地金もその多くを製造した。大坂の銅加工業も発展し、京都の高級品に対して大衆向けの実用品を製造するという分業関係が展開しはじめたと考えられる。細工向き銅をめぐる分業はさらに発展し、真鍮産業の発展が原動力となって地売銅市場で仲買が台頭し、②の時期に移行するものと考えられる。真鍮産業の発展や細工向き銅市場における分業の展開は、現在必ずしも十分に明らかになっていない。大坂銅商人社会の実態とその変遷を追う作業は、分業関係とその展開を解明する基礎的作業として本書の課題である。

（3）最後に銅座による統制について。近世には銅座が三度設置され、設置時期で区別して、元禄銅座、元文

銅座、明和銅座と呼ばれる。その要項を列記すると次のとおりである。

①元禄銅座

設置期間・別称 元禄十四～正徳二年（一七〇一～一二）、第一次銅座

設置形態・役所の所在 銀座加役の臨時の役所、大坂銀座役所近隣ほか

幹部役人 銀座年寄・元メ

主要業務 長崎御用銅を銅吹屋から購入し長崎で輸出

銅吹屋の業務 御用棹銅売上げを独占、荒銅あらどう・吹銅ふきどうは自由売買

②元文銅座

設置期間・別称 元文三～寛延三年（一七三八～五〇）、第二次銅座

設置形態・役所の所在 銀座加役の臨時の役所、大坂銀座役所近隣

幹部役人 銀座年寄・元メ

主要業務 荒銅を独占購入（後半は御用銅分のみ）、御用棹銅を長崎会所へ販売、吹銅を市販

銅吹屋の業務 荒銅吹立てを独占、御用銅を大坂・長崎で保管、後半は地売銅を自由売買

③明和銅座

設置期間・別称 明和三～明治元年（一七六六～一八六八）、第三次銅座

設置形態・役所の所在 勘定・長崎・大坂町奉行支配の恒久役所、過書町元長崎御用銅会所を改編

幹部役人 勘定所・長崎会所・大坂町奉行所役人

主要業務 荒銅を独占、御用棹銅を長崎会所へ販売、吹銅値段公定のち直売、さらにのち入札払い、銅

を備蓄

銅吹屋の業務 荒銅吹立てを独占、御用銅を大坂・長崎で保管、銅座統制の吹銅を売買

銅座は銅の専売機関として幕府が銅を強力に統制したと広く認識されている。しかし設置の理由や目的、統制の実態は、従来の研究で明瞭であるとはいえない。前記(1)～(2)の課題を視野に入れた研究が必要がある。銅座設置の時期には銅相場が上昇しており、幕府はそれに対処しようとしたことは間違いないが、従来それに触れた研究はない。とくに元文銅座は経営の実態はもとより目的も不明な点が多い。

本書は、銅商人社会の成立と変容の考察を糸口として、近世日本の銅の歴史を通覧するものである。その理由はまず、研究にとって不可欠な関連史料が豊富に存在するからである。とくに銅吹屋兼別子銅山師で大坂の代表的な商人でもある住友家の文書がある。これに対して、幕府の銅に関する施策や長崎貿易・長崎会所の展開、銅山元への推移などを軸にした銅の歴史の叙述は当面は困難である。例えば幕府の銅関連施策は必ずしも一貫性統一性をもっておこなわれたとはいえず、考察には広い視野をもった判断が必要である。長崎貿易や長崎会所経営は多岐にわたり、その展開に銅の問題を適切に位置づけるのは簡単ではない。また山元は、とくに前近代の日本では、鉱床の状況に影響されるところが大きいので、社会経済史的な考察には種々の限界がある。近世中後期の銅山史は個別研究の蓄積がまだまだ必要である。

銅商人社会を糸口とする研究では、銅相場の変動への反応という視点は欠かせない。銅相場関連史料は豊富とはいえず、使用にあたって記載内容の背景を把握することは必ずしも簡単ではないが、ぜひとも活用する必要がある。

第二節 先行研究と問題点

小葉田淳氏は日本の鉱山史研究の開拓者にして指導的立場の研究者である。その研究は貨幣史・貿易史・鉱山

あとがき

近世長崎貿易における銅の輸出値段、一〇〇斤につき唐人売り一一五匁、オランダ売り六一匁七五が、幕府による銅鉱業政策の核心をなすとする一説が、その値段に至る経緯や背景の検証抜きに、定説化したことは印象深い。おそらく一九七〇年代までは、多くの研究者から、その驚くほど安い値段は、もっと経緯が明らかになれば歴史上にしかるべく位置づけられると、樂觀視されていたように思う。その樂觀視は、住友家文書の利用が進展することへの期待（逆にいうと非公開への批判）とも通じていたと思う。

このきわめて安い銅輸出値段に至るまでには、本書でみたように、国内通貨の変更（新金銀通用令、通貨の品位を引上げて表示価値を引き下げる）に準じて変更された長崎銅輸出値段が、その後の国内通貨の変更（元文改鑄）や銅相場の変動にもかかわらず、固定されてしまうという経緯があった。それは鎖国制のもとで、幕府勘定所、長崎会所、大坂銅商人、錢座、山元などの間に展開された、対抗・連動・依存など種々の動きの結果であった。例示すると、秋田藩を代表とする山元が、御割合御用銅期と元文銅座初期（享保・元文期Ⅱ一七二六～四一）に示した対幕府値上げ攻勢は顕著で、それは従来の幕府と山元に関する見方（幕府が山元を抑圧）と正反対である。

このような変動を山元側から通覧するところであるのか。住友が一貫して稼行し史料が残る別子銅山は、考察に適した対象であるはずである。じつは一九九一年に刊行された『住友別子鉱山史』（住友金属鉱山株式会社）でその部分を分担したのは私であった。そこでは元文銅座にも一応は触れながら、大きな変動を認識・摘出することができなかった。今にして忸怩たるものがある。弁明すると、銅相場の史料の所在は分散的で、相場に関して考察が及ばなかったのである。おそらくその時期、別子の経営は好調だったのであり、そのために住友は、銅吹

屋の立場で負わされる巨額の負担に堪えることができたのである。

また、日本の地質鉱床の特性（大陸の端で現在も続く激しい地殻変動が重なり、日本列島ができたことに由来する）のために、近世の多くの鉱山では市況もさることながら、まず鉱床の状況が稼行の状況を左右した。別子において計画的採掘に近いことができるようになったのは、第一に鉱床に恵まれていたからであり、それに加えて経営努力があったからである。したがって別子の事例を単純に一般化して多くの鉱山に当てはめることはできず、個々について稼行状況をみていく必要がある。

私は住友史料館において、住友家文書の翻刻事業、『住友史料叢書』の刊行に従事し、上述の変動期の銅貿易関連史料を在勤中に刊行することができた。それでも、それを活用した研究が進展したとはいえない。大坂銅商人たちはもちろん、銅生産・流通の当事者たちは、幕府役人との、あるいは彼ら相互の交渉において粘り強く駆け引きした。その経緯を列記した記録には、似ているが少しずつ異なる記事がいくつも載っている場合があり、それらのなかから大きな筋を掴むことが必要である。本書は『住友史料叢書』を多く使用しており、結果としてその利用案内の一面をもつことになった。これを契機に利用が進めば幸いである。

顧みると、高校のころ歴史に関心を持ち、大学で日本近世史を専攻し、三井文庫に勤めることができた。住友修史室（のち住友史料館と名称変更）に転じ、二〇一一年まで勤務した。三井文庫と住友史料館の先輩・同僚のかがたには大変お世話になった。とりわけ、中井信彦先生、小葉田淳先生、朝尾直弘先生から懇切なご指導を賜ったことは忘れることができない。また本書がこのように上梓できるのは、田代和生氏のご親切に負うところが多く、ここに厚く御礼を申し上げます。

著 者

の	
能代銅(出羽)	43
野谷鉛銅鍾(備中)	201
延岡銅山(日向)	10
は	
治田銀銅山(伊勢)	10
播磨銅・播州銅(播磨)	44, 45
半田鉛(豊後・日向)	201
ひ	
飛驒銅(飛驒)	43
日向銅(日向)	43, 44
平湯鉛山(飛驒)	204
弘前鉛(陸奥)	201
ふ	
吹分場出銅	144
藤琴鉛山(出羽)→平山鉛・太良鉛山	
葡萄山鉛山(越後)	200
狼倉銅(陸奥)	43
へ	
別子立川銅(伊予)	277
別子銅・——銅山(伊予)	10, 42, 80, 84, 103, 121, 139, 144, 145, 154, 160~2, 171, 197, 223, 228, 229
ほ	
細倉鉛・——鉛山(陸奥)	201, 202

細谷銅山(丹波)	236
本道寺鉛山(出羽)	201
ま	
松田鉛山(美濃)	201
松前鉛(蝦夷)	201
み	
みさか村(美作)	201
三谷鉛山(飛驒)	201
三谷銅(飛驒)	235
宮部鉛山(美作)	201
も	
もちかとう(石見)	201
盛岡銅(陸奥)	277
や	
安居銅(土佐)	43
柳谷鉛山(伊予)	201
築瀬鉛山(備中)	201
柳瀬鉛山(備後)	201
矢櫃沢鉛山(出羽)	200, 203
よ	
楊枝鉛・——山(紀伊)	201, 205
横谷銅鉛山(備中)	201
吉岡銅山(備中)	235
予州銅(伊予)	161, 175

大平山銅(長門)	43
尾去沢銅・——銅山(陸奥)	11, 44, 103, 143, 161, 162, 229
尾太銀銅鉛山(陸奥)	11, 200
小野原銅(丹波)	44
小畑銅・——銅山(播磨)	44, 144
小原鉛山(備後)	201
尾平銅(豊後)	44
面谷銅山(越前)	10
か	
金堀銅山(播磨)	243
枕坂銅・——銅山(播磨)	44, 243
亀谷銀山(越中)	200
く	
郡上銀銅山(美濃)	236
鯨鉛山(備後)	201
球磨銅(肥後)	154, 174
熊沢銅(陸奥)	43
熊野銅・——銅山(紀伊)	10, 144, 145, 201
黒川銅山(摂津)	235
黒滝銅(土佐)	44
こ	
小泉銅鉛山(備中)	10, 200, 201, 205
小岩見鉛山(因幡)	201
小持松鉛山(丹後)	201
さ	
幸生銅山(出羽)	11
さつめ銅山(出雲)	201
佐渡銅・——金山(佐渡)	43, 44, 256
猿渡銅・——銅山(日向)	43, 235
三光(幸)銅・——銅山(若狭)	10, 277
三条鉛(越後)	201
し	
椎葉銅山(日向)	10
塩野銅山(播磨)	236
獅子沢銅(陸奥)	43, 44
七味銀銅山(但馬)	236

下串銅(伊予)	161
出野銅山(摂津)	236
白根銅山(陸奥)	143
新庄鉛(出羽)	201
す	
炭谷銅(出羽)	43, 44
た	
大釈鉛山(備後)	201
平山鉛・太良鉛山(出羽)	200~2
多田・——銀銅山(摂津)	10, 201, 205
多田六人銅山(摂津)	42
立木銅山(出羽)	201
立川銅・——銅山(伊予)	44, 144, 145, 161, 191
立石銅・——銅山(出羽・陸奥)	43, 44, 143
田野口銅(土佐)	43, 44
但播州の銅山(但馬・播磨)	10
つ	
津軽鉛(陸奥)	201
月沢山鉛山(出羽)	201
て	
出羽銅(出羽)	43
と	
土佐銅(土佐)	44
朽堀村鉛山(越後)	200
十和田鉛山(陸奥)	200
な	
長棟(永登)鉛山(越中)	200, 201
長登銅(長門)	43
永松銅(出羽)	43, 45
那須銅(日向)	235
南部銅(陸奥)	42, 44, 59, 61, 62, 84, 97, 145, 168, 171, 197, 228, 229, 250
ね	
根利銅山(上野)	236

や	
薬師寺又三郎	114, 115
山形屋弥左衛門	38
柳屋専蔵	53, 57
山内長治	44
山下八郎右衛門	44, 45, 58, 60
山城屋武兵衛	52, 56
山城屋保兵衛	50, 62
山田屋新右衛門	40
山田屋平七	71
山田屋平兵衛	49, 55
山田屋元之助	71
大和屋吉兵衛	45, 59
大和屋喜八	53, 57
大和屋喜兵衛	45, 46, 59
大和屋四郎兵衛	47, 57
大和屋清七	48, 56
大和屋太兵衛	53, 58
大和屋万助	52, 55, 60

よ	
吉田屋喜兵衛	50, 62
吉田屋新七	48, 56
吉田屋専太郎	50, 62
吉田屋八郎兵衛	49, 56
芳野屋源助	44
万屋喜右衛門	52, 57
万屋喜三郎	52, 57
万屋源七	44
万屋武兵衛	55, 59
万屋和助	51, 59

わ	
若狭屋三郎右衛門	39, 62

【事 項】

あ	
会津鉛(陸奥)	201
青廻鉛山(備中)	201
赤滝鉛山(備中)	201
秋田小沢銅(出羽)	253, 255
秋田銅・——銅山(出羽)	11, 42~5, 83, 131~3, 145, 152, 160~3, 168, 170, 174, 175, 182, 185, 220, 223, 228, 229, 250, 254, 277
秋田鉛(出羽)	201
明延銅・——銅山(但馬)	44, 144
足尾銅・——銅山(下野)	10, 43, 63, 66, 103
足守銅山(備中)	235
阿瀬鉛山(但馬)	201
阿仁・——銅山(出羽)	97, 103, 200, 202
あるし谷鉛山(備後)	201
い	
生野銅・——銀山(但馬)	10, 43, 44, 200, 220, 235, 256
生野鉛(但馬)	201, 205
猪谷鉛山(近江)	201
今出銅(伊予)	161
鑄物師銅(播磨)	43, 44
石見銀山(石見)	256
岩屋村鉛山(石見)	201
え	
越前銅(越前)	44
越中鉛(越中)	201
お	
大滝村奥の山(遠江)	201
大中島鉛山(出羽)	200
大野銅(越前)	44, 235, 277
大野(領)鉛・——鉛山(越前)	200, 201

は

博多屋勘左衛門 45, 58
 博多屋久左衛門 38
 博多屋次兵衛 40
 萩屋市右衛門 51, 62
 萩屋市左衛門 52, 62
 萩屋三左衛門 52, 62
 浜武源次郎 122, 123
 浜田屋治右衛門 37
 播磨屋市兵衛 53, 57
 播磨屋卯右衛門 49, 56
 播磨屋次郎右衛門 47, 57
 播磨屋辰次郎 49, 57

ひ

肥後屋六兵衛 44
 菱屋所右衛門 44
 肥前屋吉兵衛 52, 62
 日高屋次郎右衛門 44
 平野屋市郎兵衛 41, 62
 平野屋きん 41, 62
 平野屋小左衛門 39, 40, 62, 106
 平野屋五兵衛 167, 198
 平野屋三右衛門
 39~41, 62, 82, 106, 189, 267
 平野屋清右衛門 37~9, 61
 平野屋忠兵衛(銅問屋) 46, 60
 平野屋忠兵衛(銅吹屋) 39, 40, 62, 82, 106
 平野屋藤右衛門 83
 平野屋八十郎 40
 平野屋半兵衛 44, 59
 平野屋文右衛門 198
 平野屋又右衛門 167
 平野屋又兵衛 44, 45, 62
 平野屋茂兵衛 46, 47, 60, 62
 平野屋利兵衛 39, 44
 平野六郎兵衛 220, 221, 237

ふ

吹屋次左衛門 41, 62
 吹屋次郎兵衛 40
 福嶋屋喜左衛門 44, 60

福山屋次郎右衛門 37
 藤懸武左衛門 42, 153
 伏見屋市郎兵衛 49, 55
 伏見屋喜八郎 49, 56
 伏見屋四郎兵衛 106~8, 139
 伏見屋平左衛門 49, 56
 藤屋定七 52, 54, 57
 藤屋利兵衛 72
 舟橋助市 42, 153
 舟橋屋太兵衛 44, 56
 古金屋忠右衛門 44
 分銅屋七兵衛 38

ほ

北国や吉右衛門 39
 北国屋次右衛門 37, 96
 北国屋重右衛門 39, 62, 96, 97
 北国屋八右衛門 97
 ほてい屋加兵衛 37

ま

増田屋伝兵衛 38
 升屋七左衛門 44
 松井市郎兵衛 44
 松浦信正(河内守) 15, 167, 168, 175,
 176, 196, 198, 228, 230~2, 241
 松屋庄助 52, 58, 71
 松屋多兵衛 68, 72
 松や長右衛門 42
 丸銅屋喜右衛門 38, 62
 丸銅屋次郎兵衛
 39, 40, 61, 63, 82, 189, 235, 243
 丸銅屋善兵衛 44
 丸銅屋仁兵衛 38
 丸屋善七 49, 56

み

湊屋吉兵衛 53, 57
 美濃屋平兵衛 53, 56

め

綿袋屋九兵衛 52, 54, 58, 71, 95

銭屋平七	71
銭屋茂兵衛	54, 57
銭屋安兵衛	52, 58
銭屋与兵衛	40, 47, 59
銭屋理助	51, 58

そ

蘇我理右衛門	74
--------	----

た

高岡屋勝兵衛	44
高木彦右衛門	114
高嶋屋卯之助	49, 56
高嶋屋藤藏	48, 56
高田屋善兵衛	50, 62
高寺屋九兵衛	49, 56
高松屋次郎右衛門	43
田嶋屋利右衛門	43
多田屋意休	82
多田屋市郎兵衛	39, 40, 62, 106, 235, 243
太刀屋喜兵衛	36
辰巳屋善右衛門	45, 59
田中屋九兵衛	49, 56
田中屋定次郎	49, 56
玉屋佐兵衛	51, 60
玉屋彦兵衛	47, 59
玉屋六兵衛	48, 56
樽屋武兵衛	47, 57
俵屋卯右衛門	46, 60

ち

千種屋新右衛門	44
茶屋休嘉	108, 140

つ

塚口屋長左衛門	38, 57, 106
佃屋長左衛門	44, 60
津国屋六右衛門	51, 56
津国屋六藏	51, 56

て

鉄屋三郎兵衛	45, 57
鉄屋次兵衛	39, 62

天王寺屋喜兵衛	50, 61
天王寺屋久左衛門	198
天王寺屋弥右衛門	44, 58
天王寺屋与市郎	71
天王寺屋六右衛門	198
伝法屋五左衛門	44, 60
天満屋元次郎	49, 56, 98

と

道明寺屋吉左衛門	37
徳倉長右衛門(嘿齋)	220, 221, 237
土佐屋八右衛門	44
苫屋茂作	44
富屋伊右衛門	83
富屋伊兵衛	41, 62
富屋九郎左衛門	82, 235, 243
富屋藤助	40, 62
富屋彦兵衛	267

な

永井源助	42, 153
中川六左衛門	123, 124, 153, 173, 182
長崎屋(為川)五郎兵衛	151
長崎屋安九郎	235
長野屋忠兵衛	45, 59
長浜屋源左衛門	43~5, 56
中村嘉兵衛	44, 61
中村弥三右衛門	122, 123
中屋彦三郎	44
納屋長左衛門	112
奈良屋五郎兵衛	44

に

西村屋愛助	72
-------	----

ぬ

布屋治左衛門	44
布屋四郎兵衛	42, 61

の

能勢屋庄右衛門	44
---------	----

川崎屋十郎兵衛 48, 57
 川崎屋次郎左衛門 45, 59
 川崎屋千次郎 267
 川崎屋平兵衛 41, 62, 106
 川崎屋万藏 83
 川崎屋茂十郎 173
 河内屋卯兵衛 55, 61
 河内屋勘兵衛 47, 48, 57
 河内屋喜右衛門 40
 河内屋喜兵衛 50, 57
 河内屋治兵衛 49, 55
 河内屋庄兵衛 47, 50, 58
 河内屋新兵衛 51, 54, 57, 68, 71, 95
 河内屋常七 51, 57
 河内屋伝次 39, 62, 106
 河内屋ひて 49, 55
 川西屋喜助 52, 61

き

桔梗屋又八 6, 101, 112~5, 124, 140, 284
 紀伊国屋佐助 55, 57
 京屋源七 49, 55, 72
 京屋才次郎 55, 61
 京屋佐一郎 49, 56

く

釘屋喜助 47, 50, 56
 釘屋喜兵衛 48, 58
 釘屋久兵衛 48, 47
 釘屋九兵衛 48, 56
 釘屋弥左衛門 48, 56
 熊野屋徳兵衛 41, 62
 熊野屋彦三郎 38
 熊野屋彦大夫 41, 62, 83, 267
 熊野屋彦太郎 38, 40
 黒沢元重 205

こ

鴻池(屋)善右衛門 167, 198
 鴻池屋徳兵衛 167
 小嶋屋助右衛門 44, 58
 後藤惣左衛門 173
 米屋長右衛門 43

米屋長兵衛 55, 57
 小山甚右衛門 42, 153
 小山屋吉兵衛 45, 56

さ

雑質屋七兵衛 45, 60
 堺屋伊兵衛 45, 59
 堺屋次兵衛 44, 60
 坂田屋市右衛門 43
 さこや六右衛門 37
 讃岐屋孫左衛門 43
 佐野屋次三郎 53, 62
 三田屋卯兵衛 52, 60
 三田屋惣兵衛 72

し

潮江長左衛門 42, 62, 153
 塩野屋吉兵衛 43
 塩屋佐次郎 42
 塩屋八兵衛 38, 52, 58, 62
 嶋屋市兵衛 43, 45, 56
 新庄清右衛門 37
 鑰鉦屋与兵衛 36

す

菅野幸太郎 42, 153, 173
 鈴木清九郎 42, 153, 173
 住友吉次郎 205, 213
 炭屋長右衛門 48, 56
 住吉屋安兵衛 49, 55

せ

銭屋宇兵衛 43
 銭屋五郎兵衛 51, 265
 銭屋作右衛門 37, 38
 銭屋七右衛門 37
 銭屋四郎兵衛 39, 42, 47, 50, 51, 59, 256
 銭屋清兵衛 47, 50, 59
 銭屋善兵衛 47, 59
 銭屋惣兵衛 45, 47, 59
 銭屋太郎右衛門 36
 銭屋伝兵衛 51, 59, 68, 71, 72
 銭屋半兵衛 37

	え	
榎並屋庄七		54, 56
	お	
相可屋徳兵衛		45, 56
近江屋喜左衛門		46, 60
近江屋三郎左衛門		43
近江屋治兵衛		48
大坂屋久左衛門		
	38, 40, 51, 61, 82, 265, 267	
大坂屋三右衛門		41, 62, 83, 267
大坂屋助藏		266, 268
大坂屋長兵衛		52, 58
大坂屋仁左衛門		37
大坂屋又治郎		83
大坂屋又兵衛		41, 62
大田南畝		78
大塚屋市右衛門		50
大塚屋伊兵衛		47, 57
大塚屋嘉助		48
大塚屋嘉兵衛		47, 57
大塚屋喜兵衛		53, 54, 57, 58
大塚屋金兵衛		51, 58
大塚屋九兵衛		47, 58
大塚屋作兵衛		51, 57, 71
大塚屋左兵衛		47, 58
大塚屋治兵衛		47, 60
大塚屋庄助		52, 58, 71
大塚屋甚右衛門		37~40, 58, 82, 189
大塚屋善兵衛		54, 60, 95
大塚屋惣兵衛		47, 57
大塚屋太助		52, 59, 71
大塚屋太兵衛		50
大塚屋太郎左衛門		50
大塚屋長兵衛		58
大塚屋藤兵衛		47, 54, 58, 61, 95
大塚屋孫兵衛		54, 58
大塚屋弥兵衛		47, 57
大塚屋理兵衛		47, 57
大塚屋利兵衛		55, 60
岡又左衛門		112
荻原重秀(近江守)		

	113, 114, 116, 117, 124, 125
尾道屋五兵衛	45, 58
帶屋庄右衛門	44, 61
帶屋六兵衛	37
尾本吉左衛門	230~2, 238
尾張屋吉兵衛	43
	か
海部屋市左衛門	38
海部屋儀平	43
海部屋権七	43, 56
海部屋徳兵衛	43, 56
海部屋与一兵衛	44, 62
加賀屋善左衛門	43
柿本屋又兵衛	106
鍵屋季兵衛	50, 61
鍵(鑑)屋忠四郎	42, 62
郭平次右衛門	106
栢屋勘兵衛	45
栢屋四郎兵衛	43
栢屋捨松	54, 59
栢屋清助	55, 60
栢屋藤七	55, 57
栢屋与市郎	43
刀屋八郎兵衛	38
金物屋喜兵衛	51, 58
金物屋安兵衛	51, 59
金屋吉兵衛	259
金屋九兵衛	47, 60
金屋源兵衛	47, 59
金屋助右衛門	47, 61
金屋忠兵衛	47, 61
金屋長右衛門	36
金屋半兵衛	92, 93
金屋六右衛門	54, 59
金屋六兵衛	45, 47, 51, 57, 60, 265
金田屋九兵衛	52, 61
金田屋兵右衛門	39, 61
金吹屋太兵衛	52, 57
加納屋孫兵衛	52, 56
加幡弥介	122, 123
紙や仁左衛門	39
川崎屋市之丞	39, 40, 62

索引

【人名】

あ	
銅屋嘉助	51, 55
銅屋勘右衛門	46, 56
銅屋十右衛門	47, 59
銅屋善三郎	38, 62
銅屋善兵衛	37, 38
(銅屋)宗兵衛	51, 55
銅屋半左衛門	40
明石屋幸助	55, 59
明石屋新兵衛	46, 60
明石屋宗七	55, 57
阿形宗智	66
秋田屋太右衛門	72
油屋彦三郎	198
網干屋三郎右衛門	43
新井白石	113
荒物屋小三郎	49, 59
有馬屋長兵衛	55
阿波屋喜右衛門	46, 59
淡路屋利右衛門	43
淡屋次郎兵衛	44, 61
阿波屋清右衛門	43, 47, 50, 56
い	
生嶋屋善助	45, 59
池田屋七右衛門	47, 58
池田屋半兵衛	51, 57
池田屋利三郎	55, 59
池田屋利兵衛	54, 59
石谷清昌(備後守)	15, 28, 245, 246
	石田嘉平次 154, 174
	和泉屋卯兵衛 53, 61
	泉屋吉左衛門 37, 38, 40, 61, 80, 82, 121
	泉屋吉十郎 38, 55
	泉屋吉次郎 51, 265, 266, 268
	泉屋喜兵衛 48, 60
	和泉屋源四郎 46, 60
	泉屋源兵衛 52, 56
	泉屋五兵衛 43, 59
	泉屋五郎右衛門 37
	和泉屋佐兵衛 50, 62, 98
	泉屋新右衛門 198
	泉屋新四郎 43, 47, 48, 50, 59
	泉屋助右衛門 198
	和泉屋太郎兵衛 50, 58
	泉屋忠兵衛 36
	泉屋八兵衛 36
	泉屋平兵衛 38, 61
	泉屋与九郎 37
	泉屋理右衛門 38, 40, 61
	泉屋理左衛門 38, 57, 61
	泉屋理兵衛 36
	伊勢屋喜兵衛 50, 61
	伊勢屋七郎右衛門 45, 56
	伊勢屋仁兵衛 52, 57
	伊勢屋八右衛門 43
	井筒屋大吉 43, 58
	糸屋治兵衛 37
	因幡屋清左衛門 37
	今村伝左衛門 122, 123
	岩井屋嘉兵衛 43, 59
	う
	上田三郎左衛門 167, 198

◎著者略歴◎

今井 典子 (いまい・のりこ)

1942年京都市生まれ。

1965年東京大学文学部（国史学）卒業。

1968年東京大学大学院人文科学研究科修史課程（国史学）修了。

1978年住友修史室勤務，住友史料館に名称変更，2011年退職。

きんせい にほん どう おおさかどうしょうにん
近世日本の銅と大坂銅商人

2015(平成27)年5月20日発行

定価：本体7,500円(税別)

著者 今井典子

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-751-1781(代表)

装 幀 佐々木歩

印 刷 本 亜細亜印刷株式会社

© N. Imai

ISBN978-4-7842-1805-9 C3021